

メディアリテラシー科目における フェイクニュース疑似発信演習の実践

中園 長新^{1,a)}

概要：大学生を対象としたメディアリテラシー科目において、フェイクニュースの疑似発信を通してメディアとの関わり方を考える演習を実践した。演習後のアンケートからは、受講者の多くが演習を楽しむことができ、ニュースの受信者・発信者双方の立場から、現代社会とフェイクニュースの関わりについて多角的に考えることができたことが明らかになった。一方で、発信内容に関して人権等への配慮が不十分だったり、疑似とはいえフェイクニュースを発信することに抵抗を感じたりする受講者も認められた。授業内での擬似的な体験であることを活用しつつ、実際の社会でも役立つ演習とするためには、今回見出された課題を解決し、ネガティブな効果を生まないよう改善を図る必要がある。

Practice of Fake News Simulated Transmission Exercise in Media Literacy Course

NAGAYOSHI NAKAZONO^{1,a)}

1. はじめに

1.1 研究の背景

メディアリテラシーを扱った議論や実践を考えると、避けて通れないものの一つにフェイクニュース (fake news) がある。フェイクニュースは一般に「偽情報」を指すと解され、笹原 (2021) は「事実かどうかわからない情報の代名詞として使われる」言葉であると説明している [1]。総務省による『令和元年度 情報通信白書』では、「フェイクニュースの定義は、研究者によって様々である」とし、「嘘やデマ、陰謀論やプロパガンダ、誤情報や偽情報、扇情的なゴシップやディープフェイク、これらの情報がインターネット上を拡散して現実世界に負の影響をもたらす現象は、フェイクニュースという言葉で一括りにされている」と紹介している [2]。

情報化が進化した現在、大学生を含む多くの人々にとって、フェイクニュースは身近なものになってしまっ

り、社会問題の一つとして認識されている。たとえばNHKは、自社のニュースサイト「NHK NEWS WEB」において「フェイク対策 ウソの情報対策 関連ニュース」という特集ページを公開しており、フェイクニュースに関する記事を多数公開している [3]。

フェイクニュースをどのように捉え、付き合っていくかを考えるためには、さまざまな文献等を精読して教科書的な理解を深めることも重要だと考えられるが、実践的な体験ないしは演習を通したリアリティを持った学びも価値があるだろう。しかし、フェイクニュースは「嘘」を流す行為であるため、実社会において実践的体験を行うことはリスクを伴う行為であり、実現は困難であると考えられる。

そこで本研究では、大学の授業という閉じた空間においてフェイクニュースを疑似発信する演習を考案し、実践した。授業の受講者同士がフェイクニュースを発信し、それを受信するという活動を通して、フェイクニュースの在り方や拡散の背景、あるいは自分自身がフェイクニュースとどう付き合っていくかといったことを考察することができる演習を目指した。

¹ 麗澤大学
Reitaku University,
2-1-1, Hikarigaoka, Kashiwa, Chiba 277-8686, Japan
^{a)} nnakazon@reitaku-u.ac.jp

1.2 研究の目的と意義

本研究では、大学のメディアリテラシー科目におけるフェイクニュース疑似発信演習を開発し、その実践によって受講者がどのようなことを考えたのか把握することを目的とする。

本研究で開発する演習は、授業という閉じた空間で実践するものであり、社会的なリスクを回避しながら受講者がフェイクニュースを実践的に扱うことができるようになることが期待される。また、演習の結果を分析することにより、実践的なフェイクニュース演習の必要性を明らかにすることを旨とする。

2. フェイクニュースについての概説

フェイクニュース (fake news) という言葉は、2016 年頃から話題性が大きくなった。「2016 年はフェイクニュース元年である」とも言われており、この年は、イギリスの欧州連合 (EU) 離脱 (いわゆる Brexit) やアメリカ大統領選挙が世界的に大きな話題となったが、これらの背後にフェイクニュースの存在があったことが指摘されている [4]。

2017 年には、American Dialect Society による “American Dialect Society Word of the Year” [5] や Collins による “Collins Word of the Year” [6] 等において “fake news” が選定され、この時期において世界的に話題性が高まった言葉であることがうかがえる。

国際大学グローバル・コミュニケーション・センター (GLOCOM) の研究プロジェクト [7] によると、2022 年に実際に広く拡散された 6 つの「偽・誤情報」*1のうち、1 つ以上を見聞きしたことがある人の割合は 26.4% であり、単純化して捉えるならば、4 人に 1 人は何らかのフェイクニュースに触れていることになる。また、偽・誤情報を正しいと思っている人が 4~6 割程度を占め、誤りに気づいている割合 (2 割程度) を大きく上回っていることは、我々がフェイクニュースの嘘を見抜くことが困難である現状を暗示している。

フェイクニュースにだまされないためには、いわゆる「ファクトチェック」が重要である。一個人が本格的なファクトチェックを実施することは困難であるが、簡易的なチェックポイントとして「発信元をチェックして、実在の団体か本当にその団体が発信しているか確かめる」「他のメディアも同じニュースを発信しているか確かめる」といったものが提案されている [8]。

フェイクニュースと共によく使われる言葉として、「ポスト真実 (post-truth: ポスト・トゥルース)」がある。ポスト真実とは直訳すれば「真実の先にあるもの」という意味だが、その真意は「世論形成において、客観的事実が、感情や個人的信念に訴えるものより影響力をもたない状況」

*1 「フェイクニュース」と「偽・誤情報」の範囲は厳密には同一ではないが、ここでは簡略化のため同一視している。

であると説明される [9]。かみ砕いて説明するならば、ポスト真実の時代においては「事実」よりも「真実とみなされるもの」のほうが影響力が大きいということである。ここで「真実とみなされるもの」は「事実」である必要はない。すなわち、事実であれ虚構であれ、そのことが支持を得ているのであればそれは「真実」としてみなされるということである。事実と異なるフェイクニュースであっても、ポスト真実の時代にあっては多数の支持によって「真実」となり得ることが示唆される。

なお、Oxford University Press は 2016 年の “the Oxford Dictionaries Word of the Year” [10] に “post-truth” を選定しており、このことも「ポスト真実」の話題性を高めた。

3. 実践の概要

3.1 実践を行った科目の学修内容

本研究における実践は、大学 3 年次以上を対象とした専門科目「現代社会とメディア」の中で実施した。当該科目は、筆者が所属する麗澤大学 (以下、本学) 国際学部国際学科の選択科目として位置づけられており、筆者が授業担当教員である。受講者は同学科に所属する 3 年次以上の学生である。2023 年度は秋 semester に開講し、履修登録者は 54 名であった*2。

授業では、教科書として坂本・山脇 (編著) による『メディアリテラシー：吟味思考を育む』[11] を用いた。この教科書は 4 部構成になっているが、教科書のすべてを扱ったわけではなく、第 1 部「メディアの激変とメディアリテラシーの潮流」については教員による講義形式での学修として、第 2 部「ジャーナリストの視点と実践」については知識構成型ジグソー法 [12] を活用したグループワークによる演習として扱い、第 3・4 部の内容については授業では扱わず各受講者の発展学修として位置づけた。

授業の前半は主に、教科書に沿った講義を行い、後半は受講者主体の演習を多く取り入れた。授業における学修内容の概略を表 1 に示す。

本研究で開発したフェイクニュース疑似発信演習は、最終回である第 14 回授業において実践した。この実践に先立ち、授業ではフェイクニュースに関する学修をいくつか実施している。教科書第 1 部の学修を行った第 1~4 回授業では、随所にフェイクニュースが登場し、アメリカ大統領選挙やコロナ禍といった実際の場面において、どのようなフェイクニュースが流布したかを学んだ。また、第 10 回授業では、SNS とメディアリテラシーの関係を考える演習として、スマートニュースメディア研究所が開発したゲー

*2 当該科目は、旧カリキュラム履修者の別名科目と合併開講している。科目名は異なるが学修内容は同一であり、授業においては両科目の受講者を一切区別していない。本稿においても、当該科目については旧カリキュラム科目の受講者を含めて扱っている。また、学期途中で履修放棄した学生もいるため、各授業回の出席者は履修登録者数を下回っていた。

表 1 「現代社会とメディア」の学修内容

回	学修内容	形態
1	現代社会におけるメディアの様相	講義
2	メディアリテラシーの本質	講義
3	デジタル・シティズンシップ	講義
4	批判的思考とメディアリテラシー	講義
5~7	教科書第 2 部に基づくグループワーク	演習
8	現代社会とメディアに関する研究動向調査	演習
9	知識構成型ジグソー法による発表会	演習
10	SNS とメディアリテラシー	演習
11~13	メディアの歴史調査・発表会	演習
14	フェイクニュース演習【本研究の実践】	演習

※授業は 1 コマ 100 分、全 14 回で構成される。

ム教材「To Share or Not to Share」[13]を活用し、フェイクニュースが含まれる可能性のある SNS における記事シェア行為について体験的に考察した。

3.2 フェイクニュース疑似発信演習

本研究で開発したフェイクニュース疑似発信演習の概要は、次の通りである。

授業の冒頭において、教員が作成した授業資料に基づき、「「ポスト真実」の時代を生き抜く力」と題した講義を 15 分程度実施した。この講義では、現代が「ポスト真実 (post-truth) 時代」と呼ばれていることを紹介し、ポスト真実時代における SNS の位置づけを説明した後に、ポスト真実時代にどう生きるかの問題提起を行った。ただし、本講義はあくまでも事実の確認と問題提起にとどまっておろ、講義を通して受講者に何らかの結論を押しつけないような配慮を行った。

講義後、「フェイクニュースを擬似的に発信してみよう」と題した演習を行った。この演習は大筋として「フェイクニュースと真実のニュースを出し合い、もっとも真実に見えるフェイクニュースを投票で決定する」というゲーム形式をとっている。演習の概要として、次のような説明を行った (授業資料より抜粋)。

- 「一見フェイクに見えるが正しいニュース」と「一見正しく見えるがフェイクのニュース」それぞれの「タイトル (見出し)」を考え、クラス内で共有し、「どのニュースタイトルがもっとも真実っぽいフェイクニュースか」を投票で決定する
- もっとも投票数が多かったフェイクニュースが優勝だが、「正しいニュース」が選ばれた場合はアウト
- 各ニュースタイトルの真偽については、伏せた状態で共有する (演習後に答え合わせとして真偽を確認する)
- 実際のニュースタイトルを参考にしつつ、「いかにもウソっぽい本当」と「いかにも本当っぽいウソ」を考え、創作しよう
- 実在のニュースやフェイクニュースを参考にしてもよ

いが、表現についてはなるべく自分で工夫してみよう

なお、概要中にある「優勝」や「アウト」等の表現は、演習のゲーム性を喚起するための表現として用いただけであり、実際には自分のニュースが選ばれたり、フェイクニュースの代わりに「正しいニュース」が選ばれてしまったりしても、授業としては何も起こらない*3。

授業資料では、演習の流れとして次のような説明を行った (授業資料より抜粋)。演習の概略を図 1 に示す。

- 各自で「正しいニュース」と「フェイクニュース」のタイトルを考える (タイトルはそれぞれ 160 字以内で考えること)*4
- Moodle から【提出用】フォーム (Google Forms) を開き、各ニュースタイトルを提出する (氏名や真偽も)
- Moodle から【演習用】フォーム (Slido) を開き、各ニュースタイトルの「タイトルのみ」を提出する (氏名や真偽は書かない)
- 受講者全員の提出が終わったら、Slido ですべてのタイトルを参照し、もっとも真実っぽい「フェイクニュース」のタイトル (1 つ) に投票する
- 投票が終わったら、どのタイトルが多く票を獲得したか、クラス内で確認する
- 【提出用】フォームの提出内容をクラス内で共有し、答え合わせをする

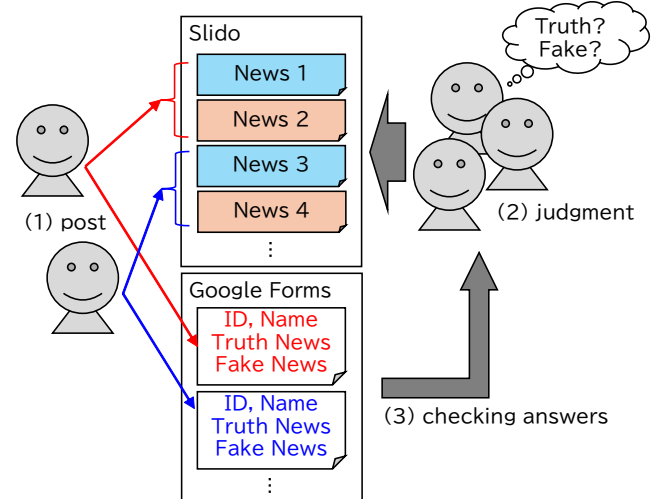


図 1 フェイクニュース演習の概略

演習後、この演習を振り返るアンケートを Moodle のアンケート機能を用いて実施した。

*3 拍手や歓声等は発生するが、成績等には一切影響しない。

*4 演習で用いるツールの制約により 160 字以上のタイトルが投稿できないため、字数制限を設けた。

3.3 演習におけるツールとその活用

本演習は、教室において対面で実施した。ただし、教員と受講者同士での情報共有を簡単かつ円滑に実施するため、次に示すオンラインツールを活用した。

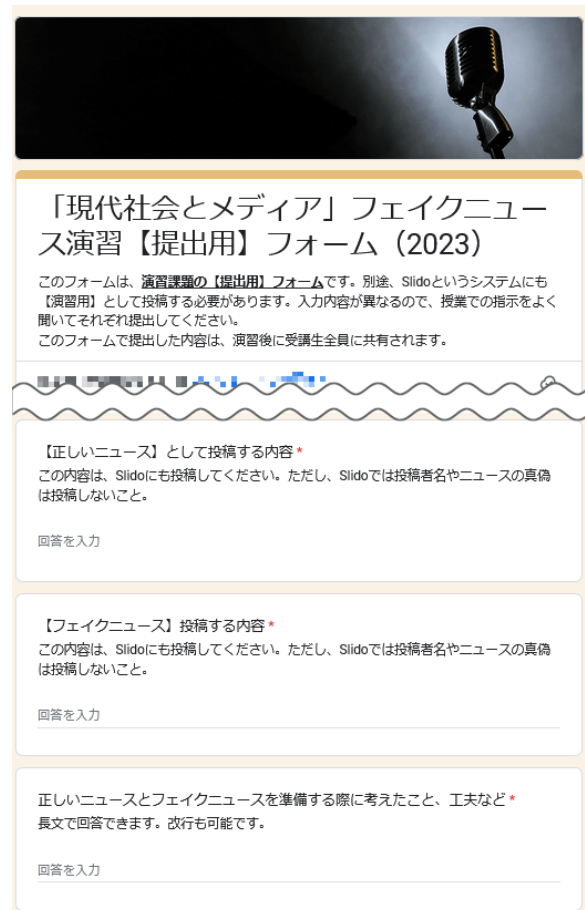
まず、科目全体としては授業資料の配信や課題の提出等に、LMSとして Moodle^{*5}を用いている。この Moodle は大学が公式に設置しているものであり、科目の受講者が科目のコースに登録することにより利用できる。

演習においては、Google Forms^{*6}と Slido^{*7}を利用した。

本学では教職員・学生の全員に Google アカウントを発行しており、Google Forms で回答する際はフォーム設置者の設定により、回答者のアカウント（メールアドレス）を収集して本人確認が可能である。この機能を利用し、演習で投稿する「正しいニュース」と「フェイクニュース」は、Google Forms で提出させることによってどの受講者がどんなニュースを投稿したのかわかるようにした。提出用フォームには、学籍番号、氏名、正しいニュースの見出し、フェイクニュースの見出しに加えて、正しいニュースとフェイクニュースを準備する際に考えたこと、工夫等を回答させた（図 2）。

しかし、このフォームの回答をそのまま受講者に共有した場合、どのニュースが正しい／フェイクかがわかってしまい、演習のゲーム性が損なわれてしまう。一方で、このフォーム回答からニュースタイトルのみを抽出してランダムに並べ替えるような操作をすれば問題は解決するが、授業担当教員が授業中にそのような操作を行うのは手間がかかる。そこで、提出用のフォームとは別に、受講者同士のニュースタイトル共有用として、Slido にまったく同じタイトルを投稿させた（図 3）。

Slido は本来、プレゼンテーションの質疑をオンラインで行うことを主としたツールであるが、登録不要かつ匿名で投稿できるという特性を持つ。そこで本演習では、あらかじめ準備した Slido のイベントを受講者に提示し、そこに「正しいニュース」と「フェイクニュース」のそれぞれを匿名で投稿するよう指示した。この作業を行うことにより、Slido 上には「正しいニュース」と「フェイクニュース」のタイトルが匿名状態で並ぶようになり、こちらを参照することで受講者は「正しいかフェイクかわからないニュースタイトルの一覧」を閲覧できるようになる。また、Slido にはいわゆる「いいね」ボタンがあり、投稿に対して「いいね」を表明できる。この表明も匿名で実施できるため、「いいね」ボタンを押すことを投票とみなし、「もっとも真実っぽい「フェイクニュース」のタイトル（1つ）に投票する」行為を実現した。



The screenshot shows a Google Forms submission page titled 「現代社会とメディア」フェイクニュース演習【提出用】フォーム (2023). The form contains three sections for text input, each with a label and a text area. The labels are: 「正しいニュース」として投稿する内容*, 「フェイクニュース」投稿する内容*, and 正しいニュースとフェイクニュースを準備する際に考えたこと、工夫など*. Each section includes a note about Slido compatibility and a text input field labeled 「回答を入力」.

図 2 Google Forms による回答フォーム（部分）



The screenshot shows a Slido interface for a session titled 「フェイクニュース演習 - 現代社会とメディア (2023)」。 It displays a list of questions and answers. The top question is "Type your question". Below it, there are three entries, each with an "Anonymous" user name, a timestamp of "5 weeks ago", and a "thumbs up" icon. The first entry has 1 thumbs up, the second has 0, and the third has 0.

図 3 Slido による回答閲覧画面（部分）

なお、演習後は「答え合わせ」として、Google Forms に投稿した内容を受講者同士で共有し、誰がどんな意図を持ってどんなニュースタイトルを投稿したのかわかるようにした。

3.4 フェイクニュース演習の実際

本演習を行った第 14 回授業は、2024 年 1 月 9 日に実施した。この回には 45 名の受講者が出席しており、その全

*5 Moodle. <https://moodle.org/>

*6 Google Forms.
<https://www.google.com/intl/ja/forms/about/>

*7 Slido. <https://www.slido.com/>

員が演習に参加した。

授業において実際に演習を行った結果、「正しいニュース」と「フェイクニュース」あわせて98のニュースタイトルがSlidoに投稿された*8。これらのタイトルに対して受講者が「もっとも真実っぽい「フェイクニュース」のタイトル(1つ)に投票」を行った結果、11票(出席者の約24.4%)を獲得したニュースが「優勝」となった*9。なお、当該ニュースタイトルはフェイクニュースであったため、「アウト」とはならなかった。

4. 演習後アンケートの分析と考察

4.1 分析対象のアンケートの概要

本演習では、演習実施後に振り返りアンケートを実施した。アンケートはMoodleのアンケート機能を用いて実施し、出席・演習参加者45名全員から回答を得た。本稿ではそのうち、アンケート回答を研究目的で利用することに同意した44名分の回答を分析・考察する。なお、アンケートは授業課題の一つとして実施したため記名式だが、研究目的で利用する際は匿名化することを明記した。また、アンケート結果は授業の成績に組み込まず、考えたことや思ったことを自由に記入するよう説明した上で実施した。

アンケートでは、次のような質問項目を設定し、それぞれ回答を得た。

- (1) フェイクニュース演習に対する、あなたの感想をそれぞれ1~5のランクで回答してください。
 - (a) フェイクニュース演習は楽しかった
 - (b) フェイクニュース演習は難しかった
 - (c) フェイクニュース演習は考えることが多かった
 - (d) フェイクニュース演習は今後の生活に役立つと思う
- (2) フェイクニュース演習で楽しかったところはどのようなところですか。
- (3) フェイクニュース演習で難しかったところはどのようなところですか。
- (4) フェイクニュース演習で考えさせられたところはどのようなところですか。
- (5) フェイクニュース演習で今後の生活に役立つと思うところはどのようなところですか。
- (6) フェイクニュース演習を終えて、あなたはフェイクニュースについてどのように考えていますか。フェイクニュースそのものや、それらを取り巻く社会など、どのような視点から回答してもかまいません。

本稿では、フェイクニュース演習に対する感想について

*8 授業では「正しいニュース」と「フェイクニュース」を1人1件ずつ投稿するよう指示したが、それ以上の数のニュースタイトルを投稿した受講者がおり、さらにゲーム性を高めるために教員自身も2件の投稿を行ったため、投稿数は出席者数の2倍とは合致していない。

*9 教員は投票に参加していない。

は各選択肢の回答者数に基づく検討を行い、その他の自由記述で得られた回答についてはKH Coder*10を用いたテキストマイニング(共起ネットワーク)を活用した考察を行った。

4.2 フェイクニュース演習に対する感想

設問「フェイクニュース演習に対する、あなたの感想をそれぞれ1~5のランクで回答してください。」については、「1: そう思わない/ 2: あまりそう思わない/ 3: どちらとも言えない/ 4: まあまあそう思う/ 5: そう思う」の5件法で回答を得た。アンケート結果を図4に示す。

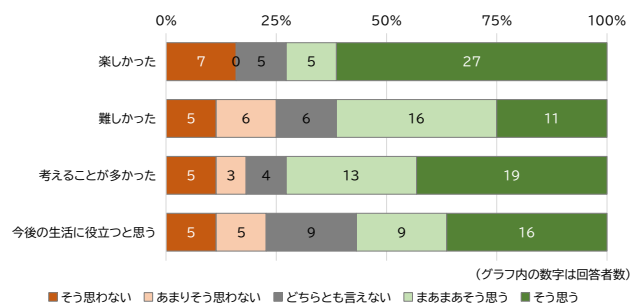


図4 フェイクニュース演習に対する感想

アンケート結果より、本演習は受講者に好意的に受け止められたことがわかる。「フェイクニュース演習は楽しかった」という項目に対しては32名(約73%)が好意的な評価をしており、「フェイクニュース演習は考えることが多かった」という項目に対しても同じく32名(約73%)が肯定的であることから、本演習は多くの受講者にとって、楽しみながら学ぶことができるものだったと考えられる。

一方で、「フェイクニュース演習は難しかった」という項目に対しても27名(約61%)が同意しており、演習が決して簡単なものではなかったことがうかがえる。

4.3 フェイクニュース演習の楽しさ

設問「フェイクニュース演習で楽しかったところはどのようなところですか。」については、自由記述で回答を得た。この回答から共起ネットワークを描画したところ、図5のようになった。

中央上部のサブグラフ(オレンジ色, Subgraph06)から、演習でフェイクニュースを扱うことそのものに楽しさを見出す層の存在が読み取れる。また、左側のサブグラフ(青緑色, Subgraph01)からは、ニュースタイトルが真実かどうかを考えることや、ユーモアあるニュースタイトルを読むことに対する楽しみがあることがわかる。さらに、右下のサブグラフ(赤色, Subgraph04)からは、本演習のゲーム性が楽しさとして受け止められていることが確認できる。

*10 KH Coder. <https://kncoder.net/>

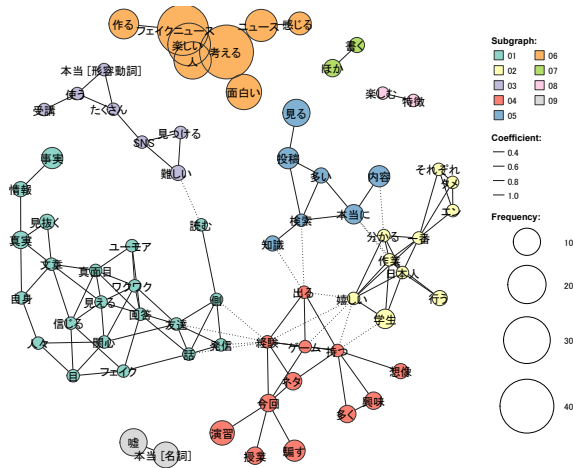


図 5 フェイクニュース演習の楽しさ

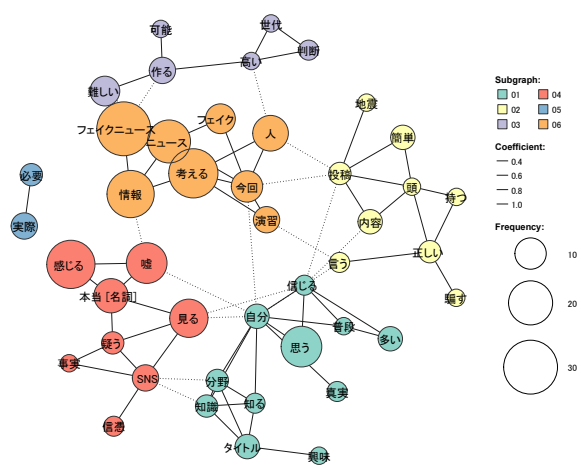


図 7 フェイクニュース演習で考えさせられた点

4.4 フェイクニュース演習の難しさ

設問「フェイクニュース演習で難しかったところはどのようなところですか。」については、自由記述で回答を得た。この回答から共起ネットワークを描画したところ、図 6 のようになった。

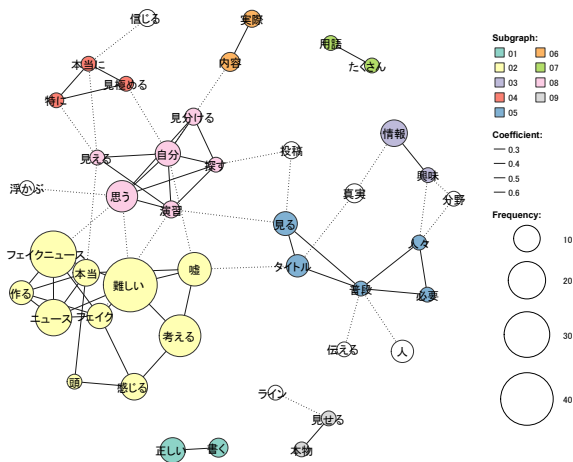


図 6 フェイクニュース演習の難しさ

中央やや左のサブグラフ（ピンク色、Subgraph08）から、ニュースタイトルの真偽を見分けるという演習の本質部分に難しさを感じている層の存在が把握できる。しかし、全体を通して目立つのは左下のサブグラフ（クリーム色、Subgraph02）であり、この部分からは、フェイクニュースを自分で考えて作り出すことに難しさを感じた回答が多かったことが読み取れる。

4.5 フェイクニュース演習で考えさせられた点

設問「フェイクニュース演習で考えさせられたところはどのようなところですか。」についても自由記述で回答を得た。この回答から共起ネットワークを描画したところ、図 7 のようになった。

中央左のサブグラフ（オレンジ色、Subgraph06）から、今回の演習を通してフェイクニュースに対する興味関心が高まったことが推察される。フェイクニュースはさまざまな報道でもよく見聞きする言葉になっているが、受講者にとっては十分に考える対象になっていなかったのかもしれない。本演習がフェイクニュースについて考えるきっかけとなったのであれば、演習としては十分な成果が得られたと考えることができる。

また、左下のサブグラフ（赤色、Subgraph04）からは、SNS 等に投稿されているものが必ずしも真実とは限らず、嘘が含まれている可能性を考慮したり信憑性を確認したりする必要性に気づいたことがうかがえる。さらに、右下のサブグラフ（青緑色、Subgraph01）からは、自分の考えが正しいとは限らないことに気づいたり、自分の知識が乏しい分野では嘘を見抜くことが難しいことに気づいたりした回答が見受けられた。

一方、ひとつひとつの回答に目を向けると、どのようなフェイクニュースが多く作られるか、あるいは信じられやすいかといった観点での回答も見られた。本演習ではフェイクニュースを「作る側」に立ったわけだが、「人の不幸をネタにするのはよくない」という回答があった一方で、「人が傷つくことのほうがフェイクニュースとして考えやすかった」という気づきを回答した受講者が見られた。

「フェイクニュースはネタに走るものから本当にフェイクなものまで多く存在している」といった言及も見られたが、これは今回の演習におけるフェイクニュースが、真偽が紛らわしいものだけでなく、悪ふざけのような方向の嘘を盛り込んだものも多く含まれていたことを指摘している。授業課題としては「一見正しく見えるがフェイクのニュース」を考えさせ、「どのニュースタイトルがもっとも真実っぽいフェイクニュースか」を投票で決定するというゲーム性を持たせることによって、悪ふざけのようなものは排除することを意図していたが、受講者の実際の発想はそこま

でコントロールできなかった。

4.6 フェイクニュース演習と今後の生活の関わり

設問「フェイクニュース演習で今後の生活に役立つと思うところはどのようなところですか。」についても自由記述で回答を得た。この回答から共起ネットワークを描画したところ、図8のようになった。

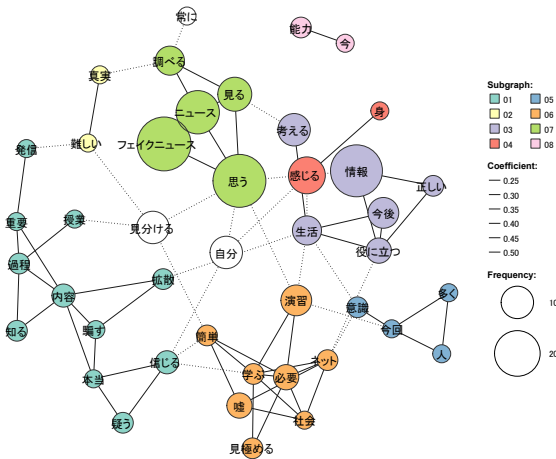


図8 フェイクニュース演習と今後の生活の関わり

この分析結果からは、出現頻度の大きい単語を多く含むサブグラフ(緑色の Subgraph07 や紫色の Subgraph03)は「フェイクニュースについて考えることは生活に役立つ」という一般的なことを記述しているように読み取れる。一方で、左下に広がっているサブグラフ(青緑色, Subgraph01)からは、情報の信憑性をときには疑うことも必要であることや、内容をよく確認した上で情報の拡散を行わなければならないといった気づきが見出された。また、中央下部のサブグラフ(オレンジ色, Subgraph06)からは、演習で体験した内容が、ネット社会を生きていく上で役立つことに気づいた回答があったことを示唆している。

4.7 フェイクニュースへの意識

設問「フェイクニュース演習を終えて、あなたはフェイクニュースについてどのように考えていますか。フェイクニュースそのものや、それらを取り巻く社会など、どのような視点から回答してもかまいません。」は、演習の総まとめとしての意識を自由記述で回答させたものである。この回答から共起ネットワークを描画したところ、図9のようになった。

右上のサブグラフ(クリーム色, Subgraph02)や左下のサブグラフ(紫色, Subgraph03)において、「地震」や「災害」といった語句が見える。授業で用いた教科書をはじめ、フェイクニュースを扱った書籍・文献等は、自然災害やパンデミックといった非常事態でのフェイクニュースの状況を扱っているものが多く、そういったエピソードが受講者

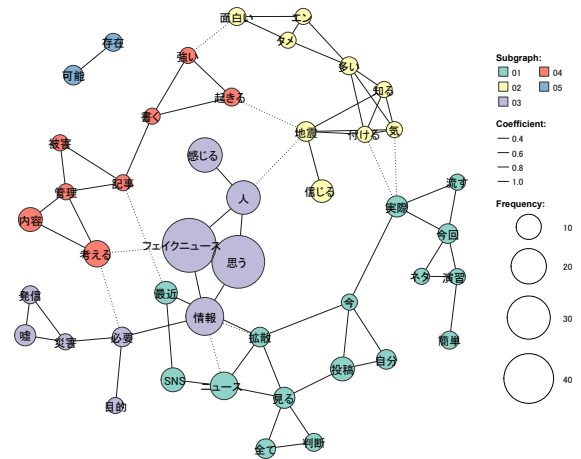


図9 フェイクニュースへの意識

にとってインパクトが強かったものと考えられる。また、本演習を行ったのは2024年1月であるが、演習の直前、同年1月1日に地震が発生し、石川県の能登半島を中心に大きな被害が出た(令和6年能登半島地震)。この印象が強い状態での演習となったため、災害との関連を意識する回答が多くなった可能性がある。

右下のサブグラフ(青緑色, Subgraph01)から、SNSやニュースの内容に対して自分自身で判断したり拡散の可否を決めたりする姿勢が読み取れる。左上のサブグラフ(赤色, Subgraph04)においても、記事内容を考えることに言及するキーワードが見出されており、全体を通して、受講者がSNS等のメディアに対し、批判的に受け止めよう意識するようになったことがうかがえる。

一方で、この図の中には「エンタメ」^{*11}や「ネタ」といった語句も見取ることができる。これらの語句はたとえば「エンタメ系のネタのようなフェイクニュースは間違えだと気づくことができる」「エンタメとしてのフェイクニュースは虚偽と見分けつきやすいものが多く、楽しむ目的として閲覧する」「面白いエンタメ要素としての[引用者註: フェイクニュースの]活用は発想力やアイデアの広がりとしてはとても素敵だと思う」といった文脈で登場していた。フェイクニュースを一概に害悪として切り捨てるのではなく、エンターテインメントとして楽しむこともできるという考えが読み取れる。

一つひとつの回答に目を向けると、このようなフェイクニュースの二面性ともいえる特徴への言及が散見される。フェイクニュースに対して「誰かを笑わせることができるものもあれば、誰かを悲しませたり混乱に陥れることもできる」「[引用者註: 悪いのは]誰かに迷惑をかけるもの限定で、一つの娯楽として眺めるだけなら悪いものではない」といった意見が見られ、フェイクニュースの娯楽性に価値

*11 図9では処理の都合で単語が分割されているが、本来はひとつの単語として出現している。

を見出すことができることが示唆されている。

また、フェイクニュースが与える影響への言及も見られた。アンケート回答の中には「人の不幸が関わっているものをネタにして共感性を生ませようとするのは道徳的に大丈夫だろうか」「フェイクニュースにより、一度は情報を疑ってみるとはいえ、すべてを最初に疑うようになったら、自分の心や性格までも影響を及ぼすこともあり得るのではないか」といった危惧が寄せられていた。「[引用者注：受講者が投稿したフェイクニュースの中に]被災に関する情報があって、あまり見ていていい気持ちにはならないタイトルもあった」といった意見もあり、フェイクニュースとしての発信内容に関して道徳観や人権等への配慮が必要であることが考えられる。

5. フェイクニュース疑似発信演習とアンケートからの考察

フェイクニュース疑似発信演習を実践し、その振り返りアンケートを分析した結果から考察を行う。

5.1 演習による受講者への影響

本演習の受講者への影響として、ゲーム性を持った演習を楽しみながらフェイクニュースについて考える機会を提供できたことが挙げられる。アンケート結果から見取ることができた通り、多くの受講者が本演習について楽しかったと回答していた。その一方で、演習に対して難しさを感じた受講者も多かったことから、本演習は「学びとしての難易度を持ちつつ、楽しみながら学べる演習」になっていたのではないかと考えられる。

また、本演習がフェイクニュースについて考えるきっかけとなったことも示唆された。大学生である受講者にとって、フェイクニュースはある程度日常的に意識に上るトピックの一つではないかと推察される。しかし、日常生活の中ではフェイクニュースに正対して考える機会は少なく、本演習がそうした機会を提供できたことは貢献の一つといえよう。

5.2 フェイクニュースに対する受講者の意識

本演習を通してフェイクニュースをどのように考えたかについては、いくつかの視点が見られた。まず、SNSやニュースの内容に対して自分自身で判断したり拡散の可否を決めたりする視点である。この視点は、災害時のフェイクニュース流布に伴う問題等を念頭に置いており、メディアを批判的に受け止めようとする姿勢がうかがえる。

一方で、フェイクニュースの娯楽性に着目し、エンターテイメントとして受け入れる視点も見られた。フェイクニュースは「嘘」を扱っているが、「嘘も方便」という諺もあるように、社会的にみても「嘘」は絶対的に悪であると

いうわけではない。そのような立場からみれば、フェイクニュースの娯楽性を肯定するという視点は一理あると考えられる。

フェイクニュースという括りとは異なるものの、インターネット等では意図的に「嘘」を娯楽のために提供しているコンテンツも散見される。たとえばインターネットサイト「虚構新聞」^{*12}は、新聞社のニュースサイトのような体裁で、「円周率割り切れる」のような嘘の記事を公開して人気を博しているし、「国際信州学院大学」^{*13}というサイトは本物の大学公式サイトのような見た目に作り込まれているが、実在しない虚偽の存在である。

こうしたコンテンツは娯楽として受容される反面、許容できないと考える層も一定数存在するため、判断が難しい。国際信州大学については2018年にTwitterで「炎上」し、それが本物のニュースメディアに取り上げられる等、単なるジョークを超えている様子もある[14]。本実践においても、フェイクニュースへの意識を問う設問への回答の中に「フェイクニュースを流す人の思想には賛成できないし、それを許容する社会であってほしくはない」といった意見もあり、すべての受講者がフェイクニュースの娯楽性を肯定しているわけではないことがわかる。本研究ではこれらの価値判断は保留するが、肯定するかどうかはともかく、フェイクニュースが娯楽性を持っていることは事実として受け入れる必要があると考える。

なお、「嘘」の善悪については哲学者による論考（たとえば[15]）や、小学校における道徳の授業での実践（たとえば[16],[17]）等、さまざまな立場からの議論があり、今後はフェイクニュースの観点からもこうした議論が深まることが期待される。

5.3 フェイクニュース演習と人権意識、道徳観

本実践では「フェイクニュースを発信する」という、社会的な危険性を伴う活動を行うため、受講者だけがアクセスできる領域において演習を実施した。そのため、演習の過程で何らかの不適切な言動がみられた場合においても、その影響は本授業実践の中だけにとどめられる。

しかしながら、それは受講者であればフェイクニュースの負の影響を被る可能性があるということでもある。本実践ではフェイクニュースの発信に際して、他の受講者が嫌な気持ちになったり、他者の権利を侵害するような内容の発信は控えるよう口頭で指導を行った。しかし、そうした配慮が受講者に十分に伝わらなかった部分があり、結果として、投稿されたフェイクニュースタイトルの中には、他者の不幸に便乗するような内容も一部見受けられた。アンケートの回答の中には、フェイクニュースの発信について「人の不幸が関わっているものをネタにして共感性を生

*12 虚構新聞. <https://kyoko-np.net/>

*13 国際信州学院大学. <https://kokushin-u.jp/>

ませようとするのは道徳的に大丈夫だろうか」「フェイクニュースにより、一度は情報を疑ってみるとはいえ、すべてを最初に疑うようになったら、自分の心や性格までも影響を及ぼすこともあり得るのではないか」といった危惧が寄せられていた。

本演習については、ただフェイクニュース発信を体験させるだけでなく、その行為が他者にどのような影響を与えるのか、他者の人権を侵害していないか、といった検討をもっと深く実施すべきであったと考える。前項で触れたフェイクニュースの娯楽性にも通じるが、フェイクニュース疑似発信演習はゲーム性を持たせているとはいえ、どこまで「楽しみ」として捉え、どこまで「学び」を意識するのか、そのバランスを今後検討していく必要があると考える。また、フェイクニュースを発信・受信する演習は、授業内で閉じているといえども受講者への負の影響を見過ごすことはできない。演習が受講者にとって負担になったり、不快感を与えたりするものにならないよう、授業者としてもさらなる配慮が必要になると考える。この点については、今後の実践における検討課題としたい。

6. おわりに

本研究では、大学生を対象としたメディアリテラシー科目において、フェイクニュースの疑似発信を通してメディアとの関わり方を考える演習を実践し、演習を通して受講者がどのようなことを考えたのかを把握することを試みた。演習後のアンケートからは、受講者の多くが演習を楽しむことができ、ニュースの受信者・発信者双方の立場から、現代社会とフェイクニュースの関わりについて多角的に考えることができたことが明らかになった。一方で、発信内容に関して道徳観や人権等への配慮が不十分だったり、疑似とはいえフェイクニュースを発信することに抵抗を感じたりする受講者も認められた。

本実践は今後も、改善を加えながら大学の授業内演習として活用していくことを予定している。今後は、授業内での擬似的な体験であることを引き続き活用しつつ、実際の社会でも役立つ演習とするために、今回見出された課題を解決し、ネガティブな効果を生まないよう改善を図る必要がある。

謝辞 本研究で実践したフェイクニュース疑似発信演習は、立教大学 村上祐子教授の授業実践に着想を得て、本稿筆者が独自に開発したものである。アイデアを提供いただいた同氏に深く感謝する。本研究は、JSPS 科研費 JP21K02864 の助成を受けたものである。

参考文献

[1] 笹原和俊：フェイクニュースを科学する：拡散するデマ、陰謀論、プロパガンダのしくみ (DOJIN 文庫), 化学同人 (2021).

- [2] 総務省：令和元年版 情報通信白書 (2019).
- [3] NHK：フェイク対策 広がる嘘の情報対策 関連ニュース, NHK NEWS WEB (オンライン), 入手先 (<https://www3.nhk.or.jp/news/word/0002471.html>) (参照 2024-02-10).
- [4] 山口真一：ソーシャルメディア解体全書：フェイクニュース・ネット炎上・情報の偏り, 勁草書房 (2022).
- [5] American Dialect Society: “Fake news” is 2017 American Dialect Society word of the year, American Dialect Society (online), available from (<https://americandialect.org/fake-news-is-2017-american-dialect-society-word-of-the-year/>) (accessed 2024-02-10).
- [6] Collins: Collins 2017 Word of the Year Shortlist, Collins Language Lovers Blog (online), available from (<https://blog.collinsdictionary.com/language-lovers/collins-2017-word-of-the-year-shortlist/>) (accessed 2024-02-10).
- [7] 国際大学グローバル・コミュニケーション・センター：Innovation Nippon 2022 報告書「偽・誤情報、陰謀論の実態と求められる対策」(2023).
- [8] 中橋 雄 (監修)：10 歳からの図解でわかるメディア・リテラシー：「情報を読み解く力&発信する力」が身につく本, メイツユニバーサルコンテンツ (2023).
- [9] 辻 泉：変わりゆくリアリティ：二項対立から多項対立の時代へ, メディア社会論 (辻 泉, 南田勝也, 土橋臣吾, 編), 有斐閣, pp. 151–170 (2018).
- [10] Oxford University Press: Oxford Word of the Year 2016, Oxford Languages (online), available from (<https://languages.oup.com/word-of-the-year/2016/>) (accessed 2024-02-10).
- [11] 坂本 旬, 山脇岳志 (編著)：メディアリテラシー：吟味思考を育む, 時事通信社 (2022).
- [12] 教育環境デザイン研究所：知識構成型ジグソー法, (オンライン), 入手先 (<https://ni-coref.or.jp/archives/5515>) (参照 2024-02-10).
- [13] スマートニュースメディア研究所：To Share or Not to Share (オンラインゲーム教材), (オンライン), 入手先 (<https://media-literacy.smartnews-smri.com/>) (参照 2024-02-10).
- [14] 産経新聞：「国際信州学院大職員が50人分の予約無断キャンセル」…飲食店ツイート大炎上 実は大学も店も架空だった, 産経ニュース (オンライン), 入手先 (<https://www.sankei.com/article/20180515-IOZPMPMIKZL3BEBDX6RRVQH7M/>) (参照 2024-02-10).
- [15] 中島義道：ウソつきの構造：法と道徳のあいだ, KADOKAWA (2019).
- [16] ポプラ社：ついてもいい嘘って、どんな嘘？：『答えのない道徳の問題 どう解く？』を教材にした、道徳の授業の進め方, ポプラ社こどもっとラボ (オンライン), 入手先 (<https://www.poplar.co.jp/topics/45593.html>) (参照 2024-02-10).
- [17] 宮本真行：道徳授業 私の実践 子どもたちが自分なりの答えを見つけられる授業を目指して, 学研 学校教育ネット (オンライン), 入手先 (<https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/reading/2112/>) (参照 2024-02-10).